

氏名	田中明
学位(専攻分野)	博士(工学)
学位記番号	工博第2915号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工学研究科建築学専攻
学位論文題目	修学院離宮創設の建築論的研究

論文調査委員 (主査) 教授 前田忠直 教授 高橋康夫 教授 門内輝行

論文内容の要旨

本論文は、修学院離宮の制作者と見なせる後水尾院、靈元院、光格院の「場所経験」の在り方に着目し、修学院離宮御幸の史料（詩歌集、日記、御幸録など）の精緻な分析に拠り、修学院離宮創設の事態を構造化し、解明するものであって、5章からなっている。

序章では、諸亭の構成を各上皇の御幸に即して考察している。第1節では、後水尾院の御幸から造営当初の構成を分析し、浴竜池での遊興と池上に臨む止々斎の構成を明らかにした。第2節では靈元院の御幸から離宮中期の構成を示し、周辺の野山への散策と、その拠点としての隣雲亭の構成を分析した。第3節では光格院御幸から近世末期の構成について考察し、離宮を和歌の会と管弦の会の遊興の場所として分析し、上下離宮の分離構成の意味を明らかにした。結として、各上皇の遊興を支える上下離宮の構成の成立と、上離宮を象徴する浴竜池の意味を明らかにした。

第1章では、修学院離宮の所在を考察している。「離宮」なる名称の「離」の語を手がかりとして、離宮の所在の実相を分析した。方法としては、修学院離宮が創設された「山」なる場所の経験について、『靈元院法皇御幸宸記』に即して分析した。第1節では、「修学院というところに隠りはべりし頃」（兼好法師歌集）と題された歌と靈元院のそれに対する和答の記事を分析し、「都」を離れ「山」へ御幸する意図を、「憂いた心をなぐさむ」ものと分析した。「とをさ」という距離経験を「世をのがれようとする心」の問題として明らかにした。第2節では、靈元院による御幸に際して「山」より「都」を遠望する経験を分析した。そこでの遠望は「はるか」「へだて」なる意味をとまなう「遠き都」なる経験であり、都を離れつつ眺望する経験として分析した。第3節では「山」と「都」の両者を統べる地平構造を、「山」の外を遠望する経験として分析した。すなわち修学院離宮の所在を、先ず「比叡」の麓という日常世界の際なる場所として明らかにし、さらに日常性を支える地、すなわち「ながめの末ぞ果てなき」「満山一様」という無限の「山のあなた」を望む場所として分析した。

第2章では修学院離宮における制作者の問題を論究した。先ず第1節では靈元院と後水尾院の関わり合いについて既往研究より両者の共通性を明らかにした。また靈元院が後水尾院の画像前で詠んだ「故院御影前述志」を分析し、靈元院にとって後水尾院という人物が追慕の対象であったことを明らかにした。特に靈元院における修学院離宮御幸にのぞむ態度として、「をしえし道にいたる」とともに「君がみゆきの跡ならばばや」という御幸の目的を明らかにした。また第2節では前節で示した「跡」についての考察のなかで、御幸における「跡做う（跡つけ）」の諸相について分析した。特に後水尾院「八十之御賀」における靈元院との交渉に着目することで、「道標」としての修学院離宮の制作意図を解き明かした。つまり靈元院に拠って制作者としての後水尾院が示されると同時に、後水尾院の足跡が「道標」として、原初を指し示すものとして明らかにした。第3節では後水尾院によって遺された「道標」の現れる契機を明らかにし、そこには実在的景物を伴って現れる後水尾院御幸の「再現」とともに、八景詩歌に拠る景物不在の風景視として「道標」が現われる実相を明らかにした。

第3章では、修学院離宮における風景視の「道標」について論究した。『修学院八景詩歌』、ならびに『修学院十境詩』を風景産出の場所構成として論究した。第1節では『修学院八景詩歌』の解説に拠り、離宮構成の意味を分析した。すなわち

『修学院八景詩歌』が古典『瀟湘八景』に多くを拠り、実在的な景物を対象とせず、理念的な情景が詠み集められていることを示した。しかし事物としての離宮の不在があくまでも後水尾院を上皇として意味づける風景獲得を意図した積極的詠歌であることを解明した。とくに八景詩歌における離宮不在の意味について分析し、遊興の「舞台」としての離宮の場所創設の事態を明らかにした。第2節では修学院離宮内部における諸場所の構造を『修学院十境詩』の解説により、上、下離宮の構成として分析した。すなわち、下離宮は「月」を眺める場所であり、「月」とは天体として眺める月でありながらも、「年月」として上皇の生きた経歴であり、天子の実存であることを明らかにした。一方、上離宮における諸場所もまた風、雲、景色に上皇が見出され、それらは下離宮における「月」の詠歌と同様の構造を有するものであることを明らかにした。しかし浴竜池において主題化される「月」は、下離宮他のように眺める対象としての月でなく、「太虚」に映し込まれた上皇の「天顔」を明らかにする「月」であることを示した。池の「太虚」は、前節の「不在」と関連し、離宮それ自体は何ものをも媒介しないもの、つまり風景産出の契機であることを分析した。第3節では離宮における風景生成の実相について論究した。上下離宮の中間領域は無限の野山を包み込み、上下往来の「途上」という仕方で風景視を可能とさせることを解明した。さらに離宮は、周囲に展開する野山を方位づけ、八景詩歌に代表される上皇の風景を集撰するものであることを明らかにした。

終章では、「場所創設」の諸事象を光格院御幸に従い再考するものであり、本論文の結論である。上皇の御幸は季節ごとの慣例行事として繰り返されたが、それは後水尾院の御幸を原初として希求し、反復のうちに構成される生きた経験であることを明らかにした。この経験は、そのつどの新たな経験であり、場所を介した原初との出会いであることを示し、霊元院では、後水尾院の追跡において生成される風景であることを明らかにした。修学院離宮は後水尾院によって創設されたひとつの制度（第2の自然）として成立し、構造化された場所として建築（施設）、地形、風景を包含する。後水尾院以後の上皇らによる御幸行為の反復は、それ故、その場所における原初の「再一現」である。霊元院、光格院もまたそうした事態を生きた創設者であることを解明した。

論文審査の結果の要旨

本論は、修学院離宮の制作者である後水尾院、霊元院、光格院の「場所経験」に着目し、詩歌、日記の精緻な分析に拠り、修学院離宮創設の事態を構造化し解明するものであり、得られた主な成果は次のとおりである。

1. はじめに諸亭の構成を各上皇の御幸に即して示し、各上皇御幸における遊興を支える上下離宮の構成と上離宮における浴竜池の意味を明らかにした。

2. 『霊元院法皇御幸宸記』に拠り、修学院離宮が創設された「山」の経験について分析し、「都」を離れ「山」へ御幸する意図を明らかにした。さらに「山」の外を遠望する経験を分析し、「比叡」の麓という日常世界の境界の場所を解明した。

3. 霊元院と後水尾院の関わり合いを主題化し、後水尾院が追慕の対象であることを明らかにすることにより、「道標」としての修学院離宮の制作意図を示し、制作者としての後水尾院を明らかにした。さらに御幸において「道標」の現れる契機を示し、八景詩歌の分析に拠り「道標」の意味を明らかにした。

4. 『修学院八景詩歌』の解説に拠り、事物の「不在」の意味について分析し、遊興の舞台としての離宮創設の事態を解明した。さらに『修学院十境詩』の解説に拠り、上下離宮の構成を分析した。つまり上下離宮の中間領域が「途上」という仕方で風景視を可能とさせることを解明し、さらに離宮は四周に方位を与え、八景詩歌に代表される上皇の風景を集撰することを明らかにした。

5. 離宮創設の事態を光格院御幸に従い離宮の意味を考察し、反復される御幸が、離宮創設の原初の経験であることを示した。修学院離宮は、後水尾院によって創設されたひとつの制度（第2の自然）として成立し、構造化され、空け開かれた場所として建築（施設）、地形、風景を包含するのであり、上皇らによる御幸行為の反復の意味は、この空け開かれた場所における離宮の再一現であり、それ故、霊元院、光格院もまた離宮創設者といえることを明らかにした。

本論文は、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。平成20年2月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。